

GIA設計 正会員 西村 浩
 東京大学 正会員 藤野陽三
 東京大学 正会員 斉藤 潮

1. はじめに

建築あるいは都市のデザインにおいて、伝統性・地域性の表現を要求される場合、表層のデザイン操作による方法と、伝統的な空間のあり方を再現する方法の2つが考えられる。特にポスト・モダン時代には、近代建築思想の反省から伝統性・地域性の表現が求められることが多く、またそれらが前者の方法すなわち表層のデザイン操作によって実現される傾向にあった。その結果、ポスト・モダン時代の伝統性・地域性の表現には、非常に直喩的なデザインとなり、決まったパターンに帰着してしまっている例が多く見られる。

一方、後者の方法すなわち伝統的な空間のあり方を再現する方法は、多様な表層の表現を受容し、かつ伝統性・地域性を継承していくことのできるものであり、今後の時代における有効な伝統性の継承方法であると考えられる。従って、本研究では、伝統的な空間のあり方を反映していると判断できる現代建築を対象に、伝統的な空間構造を分析することを目的としている。

2. 事例調査

本研究では、現代に継承されている日本の伝統性を抽出するために、設計主旨から判断して日本の伝統性を反映している現代建築を対象に事例調査を行った。

また、各事例の設計主旨から日本の空間に関するキーワードを抽出したが、それらは大きく分けて「結界」「境界の曖昧性」「奥性」「回遊性」の4つに分類された。この4つの分類とそれらに対応する日本の伝統的空間との対応は、表1の通りである。

分類	対応する伝統的空間
「結界」	・ 神社の鳥居・橋 ・ 帳場まわりの低い可動式の格子状の木枠
「境界の曖昧性」	・ 軒下空間（内部と外部） ・ 都市のすき間（公共性と私性） ・ 神社の参道（聖域と俗域）
「奥性」	・ 座敷の奥 ・ 神社や森の奥深さ
「回遊性」	・ 日本庭園（回遊式庭園）

表1 キーワードの分類と伝統的空間構造

3. 伝統的空間構造の分析

以上4つの分類に示された、現代建築に現れた日本の伝統的空間は、いずれも2つあるいはそれ以上の空間の存在を前提とし、それらの関わり方のヴァリエーションとしてとらえられる。そこで、まずその最小単位として、2つの空間の関わり方について考える。

2つの空間が存在するということは、必ずその間に境界が生じる。従って、2つの空間の関わり方を考える場合、図1のように、空間に関する軸と境界に関する軸をとることによって、それらの関わり方を総合的にとらえることができる。すなわち、空間に関しては、「実体的」に明確な2つの空間が認識される場合と、物理的には1つの空間であるが何らかの刺激によって「心理的」に2つの空間が認識される場合が考えられる。また、境界に関しては、明確な線状の境界が存在する場合と2つの空間の間に第3の空間ともいべき中間領域を介在させる場合がある。

このような2つの軸を設定することによって、2つの空間の関わり方は、図1のように4つのパターンに分類される。

以下、それぞれの領域について説明した上で、先述した事例調査から抽出されたキーワードの分類との対応を考える。まず、領域Aに該当するものは「境界の曖昧性」である。その最も顕著な例は、日本の伝統的家屋に見られる縁側である。つまり、屋内と屋外という2つの空間が実体的に存在しながら、その間に縁側という中間的な領域を介在させることによって、2つの空間の境界が曖昧になっている例である。従って、領域Aのような空間のつながり方を「縁側型」と呼ぶ。

また、領域Bに該当するものは「奥性」である。その最も顕著な例は座敷である。日本家屋における座敷には、物理的な境

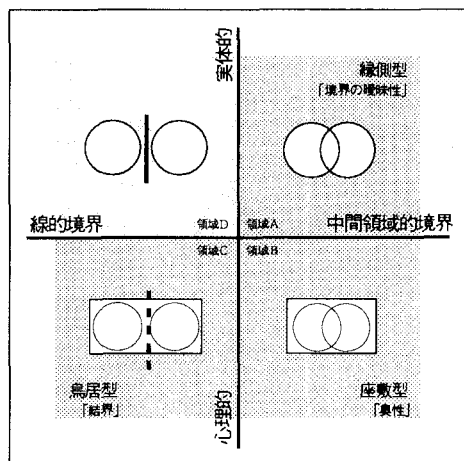


図1 「聯」の基本構造

界は何も存在しないが、日本人は「奥」という場に高いヒエラルキーを与え、手前と奥という2つの空間を心理的に認識する習性を持っている。従って、領域Bのような空間のつながり方を「座敷」型と呼ぶ。

領域Cに該当するものは「結界」である。その例としては神社の鳥居が挙げられる。鳥居は、俗域と聖域の境界を暗示しており、そこを通る人々は心理的なけじめを要求されることになる。従って、領域Cのような空間のつながり方を「鳥居型」と呼ぶ。

最後に領域Dであるが、この空間のつながり方は、厚い壁に遮られた屋内と屋外のような関係で、極めて西欧的な性質を示している。

4. 「聯」の概念の定義

本研究では、図1に示された領域A、B、Cのような、日本的な性質を示す空間のつながり方を、「聯」の概念として以下のように定義した。

「聯」の概念：2つあるいはそれ以上の空間が存在することを前提とし、それらが時間的ずれを伴って展開することによって、総体としての意味を生じること

従って、図1の領域A、B、Cは、2つの空間を対象としていることから、「聯」の基本構造を示しているといえる。すなわち、「結界」「境界の曖昧性」「奥性」は、それぞれ「聯」の基本構造の鳥居型、縁側型、座敷型で説明できるのである。

5. 高次の「聯」の構造

先述したキーワードの4つの分類の中の「回遊性」、および「奥性」については3つ以上の空間のつながりによって成立する高次の「聯」の構造として把握することができる。

「回遊性」とは、いうまでもなく回遊式庭園に見られる性質であるが、この日本的な空間構造を分析すると、図2のようになる。すなわち、「回遊性」は様々な空間の連鎖によって成立しているように見えるが、実際には「聯」の基本構造である、縁側型・鳥居型・座敷型の複合によって成立しているのである。

また、「奥性」については、最もプリミティブな意味では「聯」の基本構造の座敷型として認識できたが、現実の都市内においては、図3のように「聯」の基本構造の複合形として「奥性」がさらに強調されているのが一般的である。

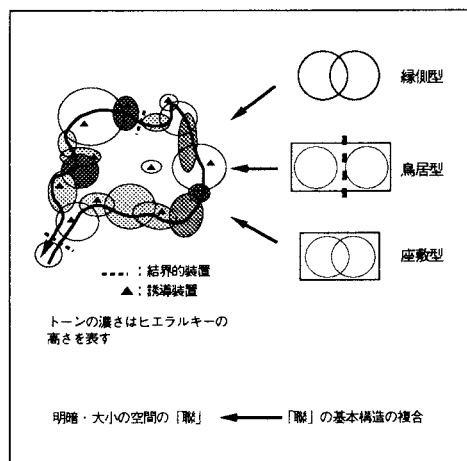


図2 高次の「聯」の構造としての「回遊性」

6. おわりに

本研究では、事例調査の中のいくつかの建築物を対象に現地調査を行い、現代建築に見られる「聯」の構造のデザイン手法について述べているが、ここでは紙面の都合上割愛する。

今回の研究によって、日本の伝統的空間構造を「聯」の概念によって、2つの空間のつながり方およびその複合形として捉えることができ、また、図1から分かるように、日本の伝統的な空間の特徴は、2つの空間のつながり方において、境界のあり方もしくは空間の認識のされ方のどちらかがルーズであることがわかった。

今回は、現代建築を対象に日本の伝統的な空間構造について考察したが、この研究が、土木の分野における空間に対する認識を高める契機になればと考えている。

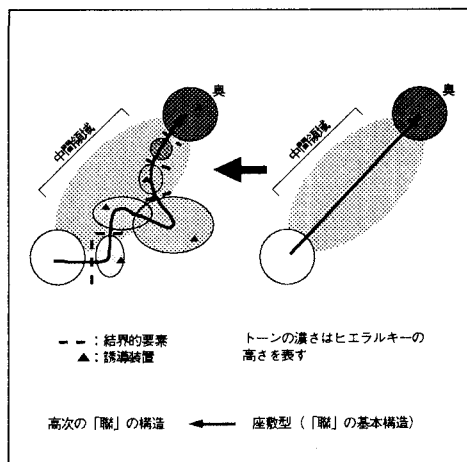


図3 高次の「聯」の構造としての「奥性」